愛国学園大学人間文化研究紀要　第14号　31～50頁　2012年３月

〔論文〕

『百と八つの流れ星』試論
― 西洋の現代批評理論で読む日本の現代文学 ―

伏　見　親　子

はじめに

本論は、文壇から距離をおいて独特の創作活動を続ける日本の現代作家、丸山健二(1943－　)の『百と八つの流れ星』(上・下巻、2009)[1]を西洋の現代批評理論で分析することを試みたものである。

20世紀の西洋の文学批評の視座を、１．エクリチュール、２．解釈・意味、３．文化的背景に大きく分け[2]、その各々の視座からこの作品を分析していく。エクリチュール(écriture, writing)とはフランス語で「書かれたもの」を指し、１の視座は、例えば論説や広告等といった文学以外の「書かれたもの」と同様の視点から、文体、表象、言説、構造、語り等といった表現方法を通して作品を見ようとする姿勢である。また２の視座は、作者と読者、創作者の意図と読者の受容の関係から作品を見ようとする姿勢であり、３の視座は、文化、政治、性、人種、政治理念等といった文化的背景の観点から作品を分析していく姿勢である。

本論では、各々独立した108の短編から成るこの作品の全体像を示し、且つ頻繁な引用を避けるために、まず〈序〉と各短編の概要、そしてキーワードを述べる。続いて３つの視座から作品を眺め、その結果をまとめて、西洋の現代批評理論から見た『百と八つの流れ星』像を示したい。

Ⅰ．『百と八つの流れ星』概要

〈序〉

いかに凡庸な、いかに愚劣な、いかに残酷な人生であろうとも、
ときとして流れ星のように輝く瞬間がある。
そして、その切なくも美しい束の間の光芒は、百と八つの煩悩の
どれかの色に染まって、この世における命の何たるかを、
天を仰いで嘆息する者たちに暗示してやまないのだ。

〈上〉

１．馬　　牧場を襲う雷神の攻撃に動じない子を宿した牝馬の「非の打ちどころがない生」「崇高そのも

の」の姿。

2．ミシン　ウェディングドレスを縫ってはうっとりと着る日々を十数年続ける女。

3．映画館　生活に疲れ若き日の理想を失った男が、場末の映画館でかつてその人生に憧れた西部劇の英雄と邂逅、生を貫徹すると誓う。

4．鉄橋　敗戦後、鉄橋から川に飛び込んだ瞬間、６人の浮浪児の脳裏に浮かんだ過去の幸福な思い出。

5．蛾　非道で放埒な生活をおくり、家族にみじめな人生を強いる父親を殺した友の達成感を共有し、防犯灯の蛾の群れの中で見送る少年。

6．格差　全く因果関係のない貧と富が、陽光あふれる昼下がりに交差。富者は貧者の中に素の自分を垣間見る。

7．雨宿り　貧しい寡婦が、雨上がりの自然から知足を感得する。「存在理由なしでも立派に生きられる。」

8．相似　結婚生活に失敗した女が、初潮を迎えた瞬間に幽体離脱を体験したことを心の糧として生きている。

9．初子　不幸な生い立ちから人生と戦うことを求め、孤独を求めていた若い漁師が、初めての「子どもの誕生を輝かしい成果として受けとめ」「孤独こそが最大の悪」と知る瞬間。

10．射殺体　警官との射合いで死んだ男の見張りを頼まれた初老の男が、奔放な悪党の死体の様に、自我を抑えて生きた「何と安価で、何と一本調子な60年」「死んでいるのは、この私」と自覚する。

11．取り立て　やくざと相棒。依頼人と瓜二つの取立て先の家人の女を見て、渡世の緊張が切れ、その途端に経験浅い相棒が死を迎える。

12．古井戸　古井戸に現れた女の亡霊。若い女と出奔した夫が人生に敗れて戻ってくる。打ち捨てられた牧場で死者と生者が再び巡り合おうとする瞬間。

13．ベランダ　アパートから５人目の身投げ。母親と二人暮らしの若い娘の死。最上階のベランダで最初に発見して狂喜する老犬の目を通して眺める卑小な人間の生と死。

14．雨乞い師　風来坊のように見える屈強な若い雨乞い師。高い櫓の上で太鼓を叩き、「地、水、火、風という四大」を刺激し、「空」から雨を降らせてみせる。

15．ハーモニカ　戦火で妻子を、戦場で片足を失い、ハーモニカを吹いて敗戦の街で生計を立てる兵士が、酒場で聞き覚えた戦勝国の「聖者の行進」を吹いて生を取り戻す。

16．復活　30代の男が野営した自然の中で見出した心の解放の瞬間。「知覚表象のすべてが心地よかった。」「威厳と慈愛に満ちた盛夏

の光…皮膚が毛穴を介して摂取するエネルギー」「五感の捉えているものが残らず賛嘆の的へと向かっていた。」「脳髄から野放図に放出されつづけていた我執がぴたりと収まっていた。」「無限大に広がってゆく心」。男が覚えた心象を「ない」を重ねて詳しく描写（pp. 094-095）。

17. 楽天　脳梗塞を起こし、リハビリに神社の階段を散歩する初老の大学教員の目前である母親が背中の赤子を置き去りに。赤子は健康そのもので笑い続けている。

18. 三角　三角形のカフェで繰り広げられる三角関係の行方を見守る中年のマスター。女だけがその関係の中で自己満足していることを見抜いている。

19. 前進　真夏の午後、廃村に365名のかつての住人と子や孫が現われ、記念写真撮影と宴会の後、廃校を網で引き倒して完全に村と決別していく。

20. わが家　政治家への献金の上前を刎ねて、田舎に一軒家を構えた男。

21. 狛犬　骨董品を扱う泥棒が廃れた神社の狛犬の稀有な価値に気づき、自分のものとしようとした瞬間に地震が起き、狛犬の下敷きになって圧死する。

22. チューリップ　真っ正直に生き、「運命は足るを知る幸福を約束し」た90過ぎの老婆の寝台の傍に曾孫によって活けられた黄色いチューリップ。死を迎えつつある老婆の「意思を超越した意識」は「どこかに愛染の心が残っていて」戦死した夫が出征する日に千人針にくるんで渡した黄色いチューリップが「彼女の中に内在化し」「今を生きるチューリップは、…過ぎた昔のチューリップと呼応し」、ともに「死の中の生へと旅立って行く。」

23. 餓死　山中に母親が若い男と出奔して置き去りにされた赤ん坊。煎餅で7日間命を繋ぐが、餓死。麓の少女が発見し、自分の幼い乳房を死んだ赤子に含ませる。

24. 薪ストーブ　世間を離れて住む70代の男が、手製の薪ストーブの炎に共鳴を感じ、生気を掻き立てられる。

25. 相違　退職後の生活の拠点を田舎に移した初老の夫婦。入浴中の妻を覗きに来る、妻を亡くした村民を村長に訴えると、田舎ではその程度の事は認めろと言う。

26. コスモス　大海原を見渡せるコスモス畑の景観が高校生の家出娘に与えた「この世は生きるに値するというゆるぎない根拠」。

27. 墓参　幼い頃に自分と母親を捨てた父の墓を探し当てた男。墓参に来て父親の思い出を清算しようとするが、山の自然の恵みで心は浄化され帰路に就く。

28. 待ち侘びて　戦後、父親の残した邸宅で

コーヒー豆の商いで生計を立てる３姉妹の次女と三女。長姉は戦死した夫の帰還を信じ、ある夜夫の軍服を着て現れる。

29. 真紅　上京して家族と別れるのを心待ちにしていた青年。母親と弟の見送りに、覚えず応えた日の朝食のクジラ肉と炭火、駅のホームの花、夕日、の「真紅が甦るたびに…人生は軌道修正に転じ」た。

30. 困惑　震災直後の街で、金庫を見つけた前科者の男は、背後から震災で死んだ女の子供に抱きつかれ、自身に湧き上がる温かい気持ちに困惑する。

31. やり過ぎ　世間から離れ、松茸を売って生活の糧を得ている父子３人。松茸泥棒を取り押さえる快感が、松茸の収穫の喜びを上回った結果、やり過ぎて御用に。

32. 廃墟　廃墟となったホテルの元支配人。小さな喫茶店を妻と営んで生計を立てているが、自分が輝いていた時代への郷愁にとらわれ、ホテルを再訪。

33. 愛人　別荘と愛人。どちらにも満足していた男が、突然の愛人の心の欝的な変化に驚く。世間体を慮る男の態度は、男女の上下関係を瞬時に逆転させる。

34. 菜食　戦争から五体満足で帰還した父と叔父。叔父は裏山に篭り、人と離れて暮らす。人肉で生き伸びたという叔父から菜食を諭され、うわさを確信する。

35. 火砕流　普賢岳か。40代の男の、島で唯一の店が火山の噴火で繁盛。火山学者と報道陣、半日帰宅許可の住民と家に戻ったところで火砕流が発生、生涯一度の興奮。

36. 悟り　悟りを求めて人生と向き合えなくなった60過ぎの老人。ある日、幽体離脱と思われる経験をし、「現世こそが偽りなき感動の宝庫にほかならないことを再認識させられ」「悟ろうとしないことこそが真の悟り」という結論に至る。

37. 影　喫茶店で、ある子供が自分の影に腹を立てているのを見て、その子の暗い将来を予言した立派な風貌の紳士。母親は腹を立てるが、漠然とした不安に襲われる。

38. 決別　戦争から公害を公認する資本主義社会へ。権力の紡ぐ社会悪の繰り返しに義憤を感じ、その一員であることを辞めることを決意した工員。

39. 酔い覚め　酔いつぶれてなぜか五重の塔の上で目を覚ました男。外に出ようとして落ち、気がつくと自室に。酒瓶を投げつけて割れた鏡には五重塔が映っていた。

40. 山男　山菜を売って一人暮らす山男。営林署の役人に山で出会い、現世の道理を盾に非難されるが、役人は落石にあって死亡。その後山男と死者は自然の中で邂逅

する。

41. 熱情　脱走兵と連れの女。交情する二人に追っ手が迫り射殺される。背景には軍国資本主義の大儀。浮かび上がるのは両性の自然体の愛。

42. 標語　山村の産業廃棄物を投棄させている土地にこっそりと十字架が立てられ、所有者の老人は激怒。灯油をかけて焼いた時、一瞬神の存在を感じた気になる。

43. ウミネコ　老いて死を迎えようとするウミネコ。嵐によって最後の飛翔をしたウミネコは、浜に座る満ち足りた表情の女のすぐ傍に自らの生と死に満足して落下。

44. 車椅子　ただならぬ雰囲気を漂わせて町の水源へと向かう車椅子の男を追う上水管理の役人。飛び込んだ男と車椅子を引き上げる。

45. 熱唱　両親の不和で廃寺の墓地に安らぎを求めて来た少年。異界とも言える土地の自然に触れ、恍惚となって熱唱。自分の生きる道を見出す瞬間。

「形あるすべての物に熟しきった生命が宿っていることが感じられ、そのどれもが、たとえ石ころひとつであっても、蝉の抜け殻ひとつであっても、この世に順応し、聖化された存在であることを悟得する。」「おのれの生に専念しなければならない」ことを悟る。

46. 落日　５歳のわが娘を酔っ払い運転で亡くし、直後に運転していた若者も自殺。水彩画を描くことで立ち直ろうとする私に太陽は「それでも生きるべし」と教示。

47. 綿雲　不治の病で長期入院する男。両親は気落ちして亡くなり、妻子は別れ、孤独の中で病室から見える綿雲に「万物を一に帰する作用すらも拒絶できる、この世で唯一の命」を感じる。月夜、綿雲が隣の子を「迎えに降りて」きた。

48. 眼光　定年を平和に迎え妻と都会の高層マンションの10階に居を構えた男。広い道路向かいのやくざ４人の眼光に生気を感じ、人生への渇望を自覚する。

49. 助産婦　幼い頃、両親が赤子を生き埋めにする光景を見て助産婦になった女が、思いがけぬ死産に打ちのめされるが、秋の夜の海の無限の豊穣に打たれる。

50. 尾行　ジャンパーを顔が見えない程たくし上げた男を尾行した、元会社経営の男。自殺願望に見える男に、そちらのことではないのかと言われ思わず顔を隠す。

51. 不動　漂白の古狸が一人暮らしのガソリンスタンド経営者の男に惹かれ「同じ星に生息する命対命という対等感に貫かれ」て近寄り、「それぞれが自分の本分を尽くす生き方を再認識する。」それが「不動の心境」。

52. 地蔵　盗人稼業の90歳の女。浜辺の地

蔵のよだれ掛けを替えた代わりに賽銭を取り、万引きした握り飯を食べて警備の女に尋問されても動じない、忘我の境。

53. 汽笛　れんげ畑で遊んでいて目を放した隙に蒸気機関車に跳ねられた弟。罪の意識が消えず独身で通した初老の女が、イベントの機関車の車窓に弟を見る。

54. 棚田　住民が次々と離村する中で棚田を増やして耕すことに生の喜びを覚える若き農夫。「自身の生の筋はきちんと通っている」「横道に逸れたことがない心は、…体認によって吟味された不動の言葉に満ちて」いる。

〈下〉

1．濃霧　遭難した漁師の父子を捜す漁民の上に濃く垂れ込める霧。遺体を発見した犬の声に駆けつけると霧は一瞬晴れ、遺体の顔には漁師の威厳が浮かんでいる。

2．館　仕事場から追われて肉体労働に就いた34歳。夜毎に大きな館の夢を見る。同僚４人が事故死した夜、夢の中で館に入り赤子から老人の自分に対面。

3．涕涙　農業とファミレスのパートで自活する40女が突然、孤独な自分の姿と未来を自覚して大泣き。憑物が落ちたように自分に関心を寄せる男性に連絡。

4．山羊　雷に驚き物置小屋の屋根に飛び乗った山羊は、高揚感に突き動かされて自由を求めてジャンプ。溝に落ちて骨折、軽蔑していた飼い主から手当てされる。

5．再会　鮎釣りで溺死した主を慕ってその川岸で生きる犬。ある日、主と同じ体臭の幼児に名を呼ばれ、再会を確信。輪廻転生。主は「高い品格…生来の根源的な資質…逃避のほかに維持することが不可能な代物」を持った男だった。

6．耽読　浜辺で剣豪物語に耽溺する時間は現実から逃れ、生気みなぎる聾唖者の少年。剣豪になったつもりでカモメから鯨の死体を守った瞬間に感じた喜び。

7．行進　次作『猿の詩集』の構想か。片目の老帰還兵がPKO派遣の自衛隊兵士の行進に向ける眼差し。その行進へ高性能爆弾が炸裂する。「平和はあくまで戦争の後になされた理論付けでしかない」。

8．灯台　酒浸りの50代の独身の旋盤工が、二日酔いの足で灯台へ。爽快な自然の中で寝そべるうち、生き別れの可愛い妹の成れの果ての姿の夢を見たことを思い出す。

9．ボート　早春の湖に半ば沈んだボートに狂った老女が近寄り、自分の半生を一人ごちてから乗り込む。本来の役目を感じて至福の時を迎える朽ちたボート。

10. 時計　私企業の左遷社員が、引越しの夜時計の音に気づく。独立に失

敗し電車に飛び込んで死んだ父の遺品が、これからの進退を迷う男の腕で時を刻んでいた。

11. ブランコ　寒村の、片や父が自殺し、東南アジア人の母が出奔した２歳児、片や両親が出稼ぎに出たままの４歳児、どちらも祖母に預けられた二人の、相手が無垢な２歳児ゆえの一方通行の交流。

12. 巨岩　天涯孤独の鬱状態の青年が転機をかけて引っ越すがまたも同じ状態に陥る。その地の荒物屋の老人に勧められるまま、山中の河原の巨岩の上に寝そべって生気と気力を得る。

13. 抵抗　農業への憧れが崩壊した町からの家族。７歳の一人娘は雄の雛が豚の餌にされる事を知り、両親に抵抗して家出をする。刷り込みで少女を親と見做した雛が、少女に親意識と自立心を芽生えさせる。

14. 洞穴　松茸採りで迷い、登った絶壁の中腹にテーブル状の岩と奥にある洞穴を見つけた40前の男。心洗われる思いをした直後、世間を破壊するか逃避している自分の姿をそこに見る。

15. 着ぐるみ　定年まで数年を残す警官が、ピンクのうさぎの着ぐるみを纏った男を尾行し、職務質問をするが、男は何も答えず去っていく。俗世とかけ離れた男に「共感と羨望の嵐」を感じる。

16. 地吹雪　家族に去られたが、地吹雪のエネルギーによって「どこまでも自分本位に生きようとする意欲」「私の擁護者は常に私自身」という認識、「自分に寄せる信頼」を取り戻した男。

17. 手錠　自販機荒らしで屈強な警官に捕まった男。相棒を捕まえ損ねた警官は男にリンチを加え、手錠を外して去る。どちらの側にもある、社会規範から逸脱したことで生じる生命の躍動。

18. 孔雀　「流動変化する宇宙の謎が謎のままごろっと放り出されている」様な壁画を粗末な辻堂に木炭で描いた若い行脚僧。彼の父親殺しを絵の孔雀は肯定し、僧は堂に放火、生き直す決意をする。

19. 風船　公園の50がらみの風船売りと幼児を連れた生活に疲れた女。風船売りは宣伝効果をねらって幼児に一つ与え、幼児の笑みにつられて思わず（商売を忘れて）笑うが、母親は風船売りに小銭を投げ与えて非難し、去っていく。

20. 再生　火砕流で生き残った桜と戦勝碑。今尚過去の栄光にしがみつく戦勝碑と、人間の営為の虚しさと「帰依に値するのは、宇宙を支える命と…大自然のみ」を悟る桜。碑は再爆発で崩壊、桜は芽吹く。

21. 徘徊　認知症で徘徊癖のある「時はおぼろなり」が口癖の50過ぎ

の「幸福」な男性。過去の断片的な記憶に現われる女性達が手招いているように見えて近寄ると、迎えに来たのは警官と家族。

22. 海亀　生活と自分の過去の一切に倦み果て、浜辺に出た男の前で、海から上がった海亀が穴を掘って自らを埋葬し始める。目による懇請で最後を手伝った男の「私は私を砂に埋めた」という実感。

23. ゴミ溜め　豪雨の夜、独身の50女が体調の急変に襲われる。厭世からそのまま死ぬことを望み、せめて化粧をして美しい公園で死にたいと向かうが、途中のゴミ溜めを目的地と思い込んで絶命。

24. 寄り道　廃村寸前の村で猿除けに野飼いにされた鵞鳥の群れが、湖に向かう途中90過ぎの老婆の家に立ち寄る。老婆は鵞鳥相手に惨めな人生を語っているうちに、突然魂が癒されるのを感じる。

25. 放浪　浮浪者がある地で一夜を明かすと、突然百姓女が現われて野菜を差し入れ、ここで働かないかと誘う。自由を得るために放浪の生活を選んだ男は思わず心惹かれるが、一瞬の後、我に返って去る。

26. 口笛　父親の法事の席で退屈のあまり口笛を吹き始めた童女。母親は庫裏の方へ連れて行くが、再び戻って始めた口笛の曲は亡き父親の18番で、亡霊が背後に控えているのを参列者全員が見る。

27. 白小鳩　出奔した妻の債務から逃れるために地下室を作って13羽の白小鳩と立てこもる50男。借金取りが去った後、鳩を部屋に解き放ち、生涯で一番幸せな時を楽しむ。

28. 街娼　相撲取りを小型にしたような街娼が路地の突当りで立っていると、右半身の不自由な老人が財布を差し出し乳房を含ませろと懇願する。女は一瞬乳房を含ませてから、突き飛ばして財布を投げ返して去る。

29. 解決　おそらくは、快適な家庭から無理に自立する手段として、即効性も効果も薄い植物用の殺虫剤を父親に飲ませて家出した息子の真意を、退院する日に突然察した父親。

30. 嫉妬　遭難者の死に顔を見慣れた登山小屋の主が、理想の死に場所を高山の天狗岩の鼻の窪みと決めて白装束で最期を迎えた男の顔に満足感が溢れているのを見て、突如嫉妬に襲われる。

31. 見せびらかし　戦後の食糧難を潜り抜けた自分を誇示するため、家の前の路上で昼食を採るのが日課の痴呆老人。警官が庭に戻そうとすると必死に抵抗するが、家人が出てきて物置に放り込まれる。

32. 焼却炉　山奥に焼却炉を建て、違法な産

業廃棄物や、果てはやくざに殺された死体まで焼き尽くす男。一切の罪悪感から解き放たれた者と、何でも食らう生き物にも見える焼却炉の好一対。

33. 彷徨　解雇され、幼い娘と子猫を連れて町を彷徨う若い男が、夜の街の路地裏で娘を売らないかと持ちかけた男を公衆トイレで殺し、現金を手にして娘と再出発を図る。

34. 荒れ模様　刑務所の中で得た感動を確かめに、出所して山奥の美術館に言った百戦錬磨の男が、別な生き方を求めようとした刹那、敵の復讐に遭い、舎弟共々敵が自爆する中、去っていく。

35. 恩返し　乳が出ない母猿に代わって猿の子供に乳を飲ませてやっている牝牛と、猿親子との交流を浪人生が目撃。牧場が売りに出される寸前、牡猿が牛を逃がすのを手伝う。

36. 爽快　少年院を出て、街で生活を続けるよりは山の下草刈りの仕事を選び、天職と認識した青年は、真夏の炎天下での作業に汗を流し、爽快さを感じている。自然の掟を従える山の制圧者として。「断然強いのは、いかなる打撃にも耐えられる自立した命」＝山の下草＝下草刈りの青年

37. 急坂　10歳の貧しい少年が、誕生日にかねて抱いていた急坂の登山を決行。あきらめずに登り切ろうと決め実行したことで、自立自尊の心の芽生えを自覚する。

38. 眼鏡　一方は透明の、もう一方はスモークのかかった二つの眼鏡に、静かな人類愛に満ちた哲学者と、凶暴な人嫌いという二重の人格を映すような生活を送っていた哲学者。朝の陽光が遺品の眼鏡を通して妻を照らす。

39. 墓穴　森の中に墓穴を掘りに来た青年と、森の賢老人のようなミミズクとの無言の会話。穴に20年間の自分を埋め、滝で沐浴して再生した青年は、真新しい服に着替えて森を出て行く。

40. 土用波　都会での恋愛に破れて郷里に戻った23歳の乙女が、土用波が打ち寄せる浜に出、波との交わりで「どの人生も首尾一貫し、浮沈の作用が循環している」ことを悟り、未練から解放される。

41. 鏡　『ドリアン・グレイの肖像』か？理想による国家是正を目指して失敗した40男が、場末の便所の鏡に映る自分の敗者然とした風貌に改めて幻滅し、鏡を蹴破って気分を一新する。

42. トラツグミ　放浪の果てダムの村に辿り着き、トラツグミの声に魅かれて詩を書き始めて30年、老詩人は車のガラスに映る自分の姿に悄然となるが、トラツグミの声に導かれて自己回復し、昇天。

43. 廃車　ホームレスの男が、近くに廃棄された車を自分のねぐらとしようとするが、所有が仲間との平等な関係を壊すと考えて川に突き落とす。廃車と共に敗残の自己を捨てた男は、再生へと踏み出す。

44. 日光浴　流浪の果てに末期癌を宣告された男が、病院の窓から射す太陽に導かれ、城壁に体を張りつけて日光浴をすることで「生と死が円をなして一巡する」ことを悟り、生命力を回復する。

45. 雨蛙　寂れた商店街の雑貨屋を営む両親が、入手経路不明の資金で兄を私立大学に行かせるのを不審に思う中学生の少年。梅雨時だけは家にいる父が雨蛙と話しているのを見た翌日、父は死ぬ。

46. 帽子　性転換をした若者が、自分を絶縁した父親の死後、女となった自分を母親に認めさせるために帰郷するが、タクシーの運転手に男であることを見抜かれ、派手な帽子のせいだと思おうとする。

47. 鶏　空き巣に失敗した常習犯が逃れた山は警官に包囲され万事休す。野生化した鶏の一家を見て心が和み、清水で咽喉を潤してから新しい境遇（囚人）に身をおこうと意を決し、出頭する。

48. 尼僧　早朝、数十名の水商売であったと思われる尼僧の集団が桜の回廊で見せた、「この場この時において自身と現世を肯定し」春の美を享受する姿。内一人は、そのまま現世に帰っていく。

49. そして今は　別れて4年目、元妻から再会を願う手紙を受け取った派遣社員の男は、抗いきれずに赴くが、再婚したが再び一人になった女の復縁の魂胆に気づいてその場を逃れ、現在の自由を喜ぶ。

50. 白鳥　翼を骨折して渡ることが出来なくなった白鳥が、ダム湖で元渡り鳥の鴨たちに囲まれる生活に嫌気が差す。鴨を襲う鷹を撃退した白鳥は「悲苦と共に生きる術を得た喜び」を感じる。

51. スイカ　老農夫が、スイカを冷やした川底に沈んでいた子山羊の死体を岸に上げ、戦後4体の嬰児が埋められた河原の林の中央に埋葬し、スイカを供える。不義の子の自分が生きて在ることと重なる。

52. 山神　迷信深い木こりが拒む、山神が宿っているという山頂の一本杉の伐採を引き受けた大工。伐採後、供えの酒と塩を自分で飲んでいる彼に「百の虹を煮詰めた」様な光彩を放つ山神が出現。

53. 誕生　臨月を迎えると夫や会社を含む社会と縁を切り、目星を付けた山上のオオカエデの大樹の下で自力出産した33歳の女。自分自身を産む、「真に共存し得る相

手はわが子だけ」という意識。

54. 海　かねて死に場所を海と定め、低気圧の接近を聞いた元漁労長は、「潔い区切りの付け方」を求めて岸の古い和船を操って沖に向かって漕ぎ出し、「この世と直談判できることの醍醐味」を味わう。海を「唯一絶対の安息所と見なし」、自分が「他の何物にも妨げられない一個の独立した存在」と感じて「この世との諧和をはっきりと自覚し」、自分にとっての浄土とは「わだつみ」であることを、男と船は願う。

Ⅱ. 分析

1. エクリチュール【表現】

『百と八つの流れ星』は上下巻とも巻頭に同じ〈序〉を置き、続いて各巻54編、計108編の、一話一話が他の短編と全く関わりがない一話完結方式の短編集である。概要から明らかなように、作品全体としては筋（plot）を持っていない。にも拘らず、全体でひとつの編成（formation）を成している。

頁構成は、各章すべて6頁、6頁×18編＝108頁、18編×3部×2巻＝108編という一種の入れ子のような形をとり、さらにその108という数字[3]は常に「百と八つの煩悩」の音を響かせている。108という数字は、この作品の中で入れ子のような構造を持って扱われているがゆえに、それは尽きることのない「無数」「無限」をも表すことになる。ならば、この作品には「無数」の「煩悩」が描かれている、ということになる。

〈序〉で作品全体を貫く主題が提示され、以後の108編の短編は「無限」に変化するその具体例となっている。そして今度は、構造が入れ子であることと呼応して、108編の各々全く異なる「無数」の具体例が、〈序〉の主題に輪郭を与え、はっきりと浮かび上がらせる、という逆作用をも引き起こしている。主題から周辺に「無限」に広がる具体例へ、そして今度は「無数」の具体例から主題へ、という双方向の関係、それがこの作品の編成なのである。これは後述するが、『胎蔵界曼荼羅』[4]と同じ編成である。

〈上〉巻の第1編は全編の総括とも言うべきもので、作者が求める「生」のあるべき姿、理想の姿が顕現する「流れ星のように輝く瞬間」が、子を宿した牝馬を通して描かれる。牝馬は牧場にわが身を横たえ、「このしがらみの世に、心身の深い安息をもって馴化し」「生きる悦び」を味わっている。「その眼差しはまるで明視できないものまで見え」、「おのれの未来も、超感覚的な視線によって鮮明に識別している」かのようである。そこを雷神が襲うが、全く動じない。「現世に何の疑いも抱かず、五感の悦楽に耽ることが上手」で「自己放棄とは反対の極みにあり、･･･生きることの何たるかを感得した崇高な安らぎ」の姿、未来を憂えず、今の生を享受する究極の姿である（pp. 003-007）。「解脱」の境地とでも言おうか。それ以後の章はその変奏曲ともいうもので、〈序〉にある「残酷な人生」の中の「美しい束の間の光芒」、「流れ星のように輝く瞬間」がさまざまなパターンを通して描かれる。

また、全編を通じてほとんど会話が見られず、登場人物、あるいは擬人化された動物ただ一人の視点から状況を一方的に提示する技法で、19世紀の英詩人アルフレッド・テニスン（Alfred Tennyson, 1809-92）やロバート・ブラウニング（Robert Browning, 1812-89）が駆使した、劇的独白（dramatic monologue）に近い形で書かれている。会話によって物語が進行することがない、つまり人とのコミュニケーションによって物語が進行することがない、一話一話異なる物語が108つ、ひいては「無限に」展開されるのである。

2．解釈・意味【意図】

この作品で最も特徴的なのは、作者が、作者の意図とは異なる読者の受容反応や解釈を極力避けるために、厳格な規制を設けている点である。作品をもはや作者の手を離れた自律した存在としてではなく、作者の意図を決して違えることなくそのまま世の中に示す存在、いわば自己の分身として、世に送り出す決意の顕れと言える[5]。

まず、登場人物と舞台背景の類型（type）化にそれが示される。つまり個性（personality）がなく、作者が抱く概念の型として分類されて登場する。

人物は、多くの場合細かく年齢が示され、固有名詞ではなく、一人称「私」か、赤子、少年、青年、中年、老人（老婆）、やくざ、という普通名詞で登場する。固有名詞で登場するのは、第１編の馬、「生」の理想の姿である「アパルーサ」くらいで、後はほんの２、３例を除いてほとんどない。他は普通名詞で登場したその編の主人公との関係を示す、「相手」、妻、姉、という言葉や、職業や地位、状況を示す漁師、助産婦、寡婦あるいは単に男、女である。アンケート用紙（questionnaire）を思い浮かべれば成程合点がいくが、回答者情報項目の、年齢、性別、続柄、職業のみの、誰でもいい人間たち（無記名）、がこの世を形成しているのである。この作品に必要なのは、それらがこの世で関係[6]しあって醸し出す（心の）現象であって、個人の性格、個性ではない。

赤子はほとんどの場合遺棄され、結果として生きるにせよ死ぬにせよ、そこに到るまで生得の生命力を発揮するものとして描かれる。青年は、社会の非情さと理不尽に気づき、人生の岐路に立つ。社会の不条理に義憤を感じる存在か、または性根の腐った存在となる。生きていく上で父性や母性を自覚または喪失し、人間性に覚醒またはそれを放棄する。中年は、社会の中で自分がいる軌道に不満と不安を感じ、社会から離脱したものは人生の糧を失っている。初老の人物は、定年退職し、年金受給の時期に来し方に疑問を抱き、行く末に改めて迷う。老人は、諦念に達し、どんな人生であれ肯定する不動の心境に到るものとして登場する。

特徴的なのはチンピラややくざが随所に描かれることで、それは丸山健二の他の作品にも共通するものでもある。小市民社会とは別の規範に生きるアウトローは、人生を選択した逞しさと生命力を持つ存在として、「生」の感得は善悪（人間社会）の規範とは無関係であることを示すものとして登場する。

馬、犬、猫、狸は擬人化され、地球に生きる人間と同じ知能や視点を持つ生命体として、人間と同じような年齢、分類で登場する。

舞台に関しては、陽光、月光、雷雨、四季

の海・山・湖・草原、廃校、廃寺、廃屋、墓地、廃された牧場が多く描かれ、それらは自然が支配、または時を経て再生し、登場人物が「生」の意味を感得する機会を提供する場である。都市、工場は、人間性、社会的批判精神を喪失する場であり、田舎、村は、自然はあっても人間が住む以上、「生」の問題が潜む場として描かれる。

修辞法（rhetoric）では、〈序〉で示した主題を繰り返し（108回）、意図を徹底して示す、欧文の長詩に見られるリフレーン（refrain）を想起させる手法をとる。どの登場人物がどの行動をとるにせよ、そこには〈序〉に示される「残酷な人生」の中の「美しい束の間の光芒」が繰り返し「無限」に描かれるだけである。

また、豊富な形容表現、例えば「日々魂の曝涼に勤しんでいるかのような」（不動　上p. 304）「慈悲の一撃を込めた」（孔雀　下p. 105）「念珠を数えるがごとき（その語り口）」（雨蛙、下p. 270）や、滅多に使用されない漢字、例えば「倨傲な笑み」（困惑　上p. 178）「大廈高楼」（廃墟　上p. 188）「遁辞的」（眼光　上p. 288）「退嬰的」（墓穴　下p. 235）など、が多用される。独特で厳密な語義を提示されれば、多義性のある言葉が可能にする自由な解釈、あるいは誤解の余地を読者は与えられない。

そして何より、読者の反応を想定し、それを列挙して「ない」を重ねることで、読者がする可能性のある、作者が望まない解釈をあらかじめ想定しては否定し、作者の描きたいものの状態を出来るだけ正確に伝えようとする。例えば第1編では、激しい雷神の攻撃下で花の中に横たわる、子を孕んだ牝馬アパルーサの姿は決して「生」を放棄しているのではなく、むしろ現在の「生」を享受していることを間違いなく読者に伝えるために以下のように描かれ、この手法は他の短編にも随所に見られる。

> しかし、アパルーサのどっしりとした態度に何ひとつとして変化はなかった。･･･無条件降伏を断々固として拒絶する勇猛心とは違っていた。また、頼り甲斐のある守護神を確信している態度でもなかった。･･･生の虚無を感じているわけではなく、心の渇きに苦しめられているわけでもなく、現世に何の疑いも抱かず、･･･悠々と過ごしている馬の姿は、崇高そのものであった。（pp. 005-006）

3．文化的背景

この作品では、背景となった現代という時代を映す事象が細かく描かれる。そこに展開する「残酷な人生」の中に、「美しい束の間の光芒」、「流れ星のように輝く瞬間」が訪れ、そこに作者の抱く思想が色濃く反映される。

舞台となる時代は、戦後の混乱期から経済成長と経済安定期を経て経済停滞期に入った現代の日本で、一見してそれとわかる、新聞などから取ったと思われる時事的な社会現象が描かれる。それらのほとんどは日本の現代社会のマイナス面であり、「残酷な人生」へと人を誘う。

紙面で言えば、一面をにぎわしたトピックと平和関連の記事を除いては、新聞の前の方にある政治、経済、国際、科学、スポーツ関連の記事はなく、社会、生活面で頻繁に取り上げられる記事が圧倒的に多い。

一面記事からは、自然災害では、嵐、地震、（普賢岳の）火砕流、時化［しけ］、土用波、豪雨が、事故関連では、登山時の遭難、

海難事故、交通事故（飲酒運転）が取り上げられている。平和関連では、第二次世界大戦、PKO派遣、超大国の軍隊が出てくるが、それが国際、経済問題という側面から描かれることはなく、あくまで個人の生活や心に影響を与える社会現象という側面から描かれる。

社会、生活面からは、過疎化問題としては、出稼ぎ、外国からの農村花嫁、後継者難、耕地放棄、廃校、山の下草刈り、ダム建設による村の荒廃が、家庭生活の問題としては、離婚、失跡、育児放棄、尊属殺、引きこもり（パラサイト）、一家離散、農薬殺人、マイホームの（不正な）資金繰りが、就労問題としては、左遷、定年、倒産、社会逃避などによる無職、フリーター、ホームレスが取り上げられている。鬱病、自殺願望、統合失調、性同一性障害といった社会への適応が困難な症状や、近年になってよく取り沙汰される不治または難治の病である、癌、認知症、若年性認知症、徘徊、突然死（脳梗塞、心筋梗塞）、アルコール依存症の問題も背景となる。

一時期流行った田舎暮らしも、その自然豊かな楽園のはずの田舎が抱える、因習、帰農（Uターン、Iターン）、農場経営のいきづまり、不法投棄の産業廃棄物処理、といった人間が生活を営む上での諸問題がある。さりとて世を逃れても、今度は中高年の一人暮らしや、一戸だけ地域社会に属さない一家を、孤独や死が襲う。そこではもう一人の自己を見るといったドッペルゲンガー（Doppelgänger）体験があれば、社会から離れた結果、常識の程度がわからなくなる「やり過ぎ」現象も起こる。いずれも現代の日本が抱える社会現象である。

そういう現代の日本で「残酷な人生」を送る人々が「美しい束の間の光芒」を見る瞬間には、作者の抱く唯識的な仏教思想[7]がはっきりと顕れる。不動の心境、埋葬（死に方、死に場所）、良き生は良き死、知足、五大、輪廻転生、現世と品格、幽体離脱[8]と悟りなどという名詞や、Ⅱ-2．で挙げた形容表現にも仏教用語が多く使われ、全編を通じてその思想は諸処に垣間見える。何より108という数字自体、Ⅱ-1．で述べたように、まず誰もが思い浮かべるのが除夜の鐘で祓う「煩悩」の数で、タイトルに使われ、〈序〉にも明示されている上に、本の頁構成にもその数字が入れ子のように組み込まれている。

また、作品には仏教的思想に対立する唯物的な資本主義社会への反発が強く表れている。資本主義社会における成功の本質への懐疑は、それとは対照的な水や土に根ざした労働、海や山の自然に生きる民への賛美となる。言い換えればそれは自然（太陽、大日）崇拝であり、自然の恵みを受けて労働する民が生きるのは大日の救済が衆生に遍く及ぶ『胎蔵界曼荼羅』[9]の世界である。人間が太陽を初めとする自然の発するエネルギーを受けて蘇生、生の至福を感得する瞬間が多く描かれる。各短編には頻繁に、陽光、朝日、夕日、真昼の太陽など放射された「光」とそれを浴びる様々な人物の姿が描かれる。

反戦思想も顕著で、国粋主義・国家権力・支配階層への反発も非常に強い。槍玉に挙がるのが、第二次世界大戦、戦後の自衛隊、それを支配して利益を得る階級である。戦争が一部階層の利益のためでもあったことを、戦後「残酷な人生」を歩むものの視点から描く。

Ⅲ．まとめ

表現方法は、現代文学としては意外なことに、冒頭に作品を貫く理念や主題もしくは全体像を提示する、日本古来の和歌集・随筆・日記の手法に非常に近い。思い浮かべるだけでも、『枕草子』『平家物語』『方丈記』『奥の細道』また歌集『古今和歌集』、後の勅撰集などがある。それらは、〈序〉あるいは冒頭の一話に続く多くの和歌や物語、エピソードの累積を読み進むにつれて、今度は逆に、作者あるいは編者が掲げた主題がはっきりとした輪郭を持って浮かび上がるような編成となっている。

『百と八つの流れ星』もまた、〈序〉に続く短編群は〈序〉に書かれた主題の108即ち「無数」の具体例の列挙であり、各短編は一編ずつ独立し、お互いに因果律はなく、〈序〉という関係を示す指標があって初めて作品として成立する。そして逆に今度は、これら108即ち「無数」の具体例があって初めて〈序〉の主題の輪郭が見えてくる。（Ⅱ-1．参照）

一編は各々自律的に存在しながら全体として調和を保っているという編成は、一つ一つの細部に仏が配置されてそれぞれが自由に動くが、各仏は大日如来の化身であるから、その動きは中央にいる大日如来の意図とシンクロニシティー（synchronicity, 同時性または共時性）の関係で結ばれている『胎蔵界曼荼羅』と同じ編成でもある。胎蔵界は英語ではマトリックス（matrix)、数学では方形の関係図である行列となる。この関係図という考え方は哲学者ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）の予定調和、物理学の量子論、文化人類学でアボリジニの親族構造を解いた群論にも通ずる[10]。

入れ子状態で「無限」に繰り返す「無数」の短編、これという答えがなく〈序〉が示す関係のみが各短編と双方向に存在する構造を見ていると、丸山はこの作品を胎蔵界の編成にあてはめることによって、現代の曼荼羅を描こうとしたのではないか、と思えてくる。

作者は自分の創作意図をそのまま明確に読者に伝えるために表現に工夫を凝らしている。言い換えれば、読者に自由に解釈する余地を与えないように（読者反応を制御するため)、比喩言語を多用し、細かく定義した表現を用いるなど、厳格な規制を設けている。

20世紀初頭のドイツ批評の雄フリードリヒ・グンドルフ（Friedrich Gundolf, 1881-1931）は、作家が創作にあたって自己の経験を象徴化する方法によって、作家を二つのタイプに分けている。世界を自分の方にひきつけるタイプ（ダンテ, Dante Alighieri, 1265-1321）は、「自己を世界の中心かつ象徴として感じている」ので、「世界の不完全性に苦しみ、世界の方は彼の内的存在の自然律に応じようとしない」、一方、世界の中に自分をのびのびと広げていくタイプ（シェイクスピア, William Shakespeare, 1564-1616）は、「世界の中で自己を蕩尽したのち、世界を自分の象徴に仕立て上げる」ので、「自己の過剰に苦しみ、自己に空間を与えることで自らを解放した」[11]、というのである。

その観点から見れば、丸山は、世界を自分の方にひきつけ、自分を世界の中心と感じる「ダンテ」タイプの作家で、どんな材料を使ってどんな人生を描こうが繰り返し投影される

のは作者の姿であり、作者の世界観である。それらは必ずしも作者自身の人生経験ではないが、作者の「内的存在の自然律に応じようとしない」世界が、そこで人間が様々に織り成す関係が作り出す心の現象が、読者の自由な解釈（作者から見れば誤読）を極力防ごうとするかのような豊富な形容表現と、「ない」を重ねる文で綴られる。（Ⅱ-2．参照）それは同時に、作者が、作品を自律したものとして自身と切り離して読者に解釈を委ねようとしない、作品の創造者としての位置を決して読者に譲ろうとはしない確固とした姿勢の顕れでもある。

またそこには、かつてダンテがそうであったように、丸山の信じる神（自然、大日如来…いずれにせよ、仮に神と呼ぶ。脚注[7]で述べたように、丸山ひいては日本人の仏教思想は遠藤周作と同様、汎神論に近い。）が在る。ダンテと異なるのは、キリストという唯一神ではなく、単に神の存在が描かれる、という点である。その存在は時には何らかの自然神の姿で出現しているようにも見えるが、それは短編の主人公以外には見えず、主人公の神でもない。またそれは全編を通じての神ではないし、丸山の神でもない。神の存在は「流れ星のように輝く瞬間」、「美しい束の間の光芒」として暗示されるだけである。まさに「この世における命の何たるかを…暗示してやまない」、神は無限にその存在を暗示し続けるだけなのである。よそ目には決して素晴らしいものに見えなくても、その瞬間は人智を超えた、人に遍く注がれる「光」である。日本の現代社会の中で「残酷な人生」を歩むものたちに、「百と八つの煩悩」の数だけ108回 —— それはまたこの作品の入れ子のような頁構成が示すように「無数」「無限」と同義なのであるが —— 大日の「光」が遍く注ぐ瞬間を、丸山健二は『百と八つの流れ星』に描いたのであろう。（Ⅱ-3．参照）

『百と八つの流れ星』は、丸山の用いた表現方法（編成）と、読者が原作から逸脱した解釈をすることを許さない緻密な制御によって構築された、彼の抱く（仏教）思想が遍く行き渡る小宇宙となっている、と言えるのではないだろうか。

おわりに

本論では、『百と八つの流れ星』を例に、西洋の現代批評理論を援用して現代日本文学作品を分析できるかという可能性を探ってみたのである。本論では1．エクリチュール、2．解釈・意味、3．文化的背景、これら3つ全ての視座を網羅する形をとったが、例えば1．の視座から108という数字の象徴するものを突き詰めて分析したり、3．の視座に絞って新聞記事を集めて作品の時代性を詳しく分析することも可能である。

批評とは、自分の立場を見極める座標、視座を得る座標であり、同時に相手の視座を理解する座標でもある。批評の視座は、時間の経過や特定の状況によっても変化する。研究者はその点を常に自覚して思考の柔軟性を保ち、たとえ同じ作品を扱う場合でも、分析にあたってはその時の自己の視座を再認識する必要がある。

西洋の現代批評理論から見た『百と八つの流れ星』は、奇しくもその「日本」的な世界観を見せてくれる結果となったが、それこそ

「日本」を西洋に見せるよい方法であると考える。こういう方法が、日本文学の翻訳以外に、外に向かう日本文学の一助になってほしいと願う。

【脚注】

1）丸山健二『百と八つの流れ星』上・下巻　東京：岩波書店，2009年．引用は頁数を（　）内に示し、…は中略を示す。作者は1943年生まれ。1967年『夏の流れ』で芥川賞受賞。安曇野に住み、作庭に励みながら小説を書く。

2）Lentricchia, Frank and McLaughlin, Thomas eds. *Critical Terms for Literary Study*. Chicago: The University of Chicago Press, 1990.

レントリッキア，フランク　マクローリン，トマス編著『現代批評理論―22の基本概念』大橋洋一　他訳，東京：平凡社，1994年．

本論は特にトマス・マクローリンの批評概念の分類に負うところが大きい。

その他、本論で参考にした西洋の現代批評理論については文末の【参考文献】に主なものを挙げる。但し、脚注に挙げたものは省く。

3）仏教の発祥地インドは掛け算の国であり、素数２と３を使った２の２乗（4）×３の３乗（27）は108である。

また、仏教の六根（人間が認識できる感覚の拠所。脚注７「図表」参照）から考えると、眼（げん）・耳（に）・鼻（び）・舌（ぜつ）・身（しん）・意（い）の６根×好（気持ちがいい）・悪（いやだ）・平（何も感じない）の３種×浄（きれい）・染（きたない）の２種×過去（前世）・現在（今世）・未来（来世）の３種で108となる。

他にも六根を使った108に至る数式が数種ある。

4）http://www.ne.jp/asahi/gifu/gokokushiji/page-mandara.htm より一部参照

玄侑宗久『私だけの仏教：あなただけの仏教入門』東京：講談社，2003年．pp. 125-128. 一部参照

・弘法大師空海が９世紀に中国から持ち帰った『両界曼荼羅』

東（左）に『胎蔵界曼荼羅（理曼荼羅）』を配し、それは『大日経』に基づく「五大」（「地」「水」「火」「風」「空」＝物質世界の理・客体）を表す。中心にある大日如来から放射状に描かれる仏はすべてその化身である。大日如来（大毘盧遮那仏）の慈悲の放射は中央から各仏を経て周辺へと向かい、反対に衆生の願いは周辺から中央へと、つまり大日如来へと収斂していく。（救済）

西（右）に『金剛界曼荼羅（智曼荼羅）』を配し、それは『金剛頂教』に基づく「識大」（客体を認識する主体・智）を表す。金剛界曼荼羅は九界に分けられ、各界中央に大日如来を配する。大日如来が衆生を救済する過程は、「の」の字型に中央から下へ右回りで右下へと向かい、衆生が悟りに到達する過程は逆に右下から左回りで中央の大日如来に到達する。

そして、『胎蔵曼荼羅』の「五大」と『金剛界曼荼羅』の「識大」は、対照的であると同時に本来は一つ「金胎理智不二」とする。

5）作品の持つ意味を作者が決定することは不可能であり、作品は作者の意図を伝えるとは限らない、なぜなら作品の意味は読者の読みという行為や時代によっても異なってくる、とする考え方（読者反応理論）があるが、丸山は意識的にその現象を回避しようとする手法をとる。

6）意味は体系内の要素間の「関係」、即ち他の要素との差異によって生じる、とするのは構造主義の基本的な考え方である。

7）『私だけの仏教：あなただけの仏教入門』pp. 171-173. 一部参照

・玄奘三蔵がインドから唐に持ち帰って成立した法相宗の根本教義である「唯識」は「唯［ただ］、識によって成り立っている（＝心だけが存在する）」とするものである。

・「識」は次の通りである。八識＝六識（視覚、聴覚、嗅覚、味覚、触覚［ここまで五感］＋意識［対象を総括して判断する心の働き］）＋二層の無意識（末那識［我執、我愛、我見の根本、迷い］＋阿頼耶識［人間存在の根本にある識で、根本識、心の主体、万有発生の源である一切種子識］）

六根（拠所）	六境（対象）	六識（認識）
眼（げん）	色（しき）	眼識（げんしき）
耳（に）	声（しょう）	耳識（にしき）
鼻（び）	香（こう）	鼻識（びしき）
舌（ぜつ）	味（み）	舌識（ぜっしき）
身（しん）	触（そく）	身識（しんしき）
意（い）	法（ほう）	意識（いしき）

『私だけの仏教：あなただけの仏教入門』p. 98. 一部参照

・仏教思想と心理学、脳科学

意識下の「末那識」の我執（フロイト、Sigmund Freud, 1856-1939の無意識[unconscious, subconscious]）が「意識」に影響を与えるが、またその下の「阿頼耶識」の根本識（ユング、Carl Gustav Jung, 1875-1961の集合的無意識[collective unconscious]）、つまり個を超えた無限の過去からの業（カルマ）による指示が「末那識」に影響を与え、さらにそれが六識に影響を与えている、とする。「末那識」の我執は脳の前頭前野部分が、「阿頼耶識」の根本識は遺伝子が担っているとする。但し、これら仏教思想と心理学、脳科学を一概に結びつけて考えるのは危険という見方もある。

カトリック作家の遠藤周作が『深い河』（1993年）の執筆前、1984年頃の講演（関西学院大学）で、「無意識の下にあるものを考えている」と語っている。ユングの「シンクロニシティー[synchronicity、共時性]」を念頭に置いていたようだが、仏教思想にあてはめると「阿頼耶識」（根本識、一切種子識）のことかと思われる。

尚、遠藤はこの作品で西欧諸国のキリスト教を離れ、日本人として汎神論に近いキリスト教徒の立場を示したと言われている。この作品で丸山が示す思想も、その点では遠藤に近いと思われる。

8）幽体離脱も1983年、アメリカの女優シャーリー・マクレーン（Shirley MacLaine, 1934-）が体験談（*Out on a Limb*）を出すなど、一時紙面をにぎわせた。

9）脚注4）参照

10）河合隼雄、中沢新一『仏教が好き！』東京：朝日新聞社，2003年．pp. 215-235．参照

・両界曼荼羅のうち胎蔵界は、英語ではマトリックス（matrix）、語源はラテン語のmater＝母で子宮や母胎を表し、数学では方形の関係図である行列となる。胎蔵界はサンスクリット語で「ガルバ」、それはまた子宮を表すという。また、胎蔵界曼荼羅では、一つ一つの細部に仏が配置され、それぞれが自由に動くが、その動きは全体に及んでいき、その仏も全体から影響を受けつつ変化している。そして仏の動きは中央にいる大日如来の意図とシンクロニシティー（同時性）の関係で結ばれていて、各々の仏は自由に動きながら、相互の意思疎通ができている。cf.）金剛界　父　九界に分けられ、各界の中央に大日如来を配する。

・ヴェルナー・ハイゼンベルク（Werner Karl Heisenberg, 1901-76）の量子論：電子の運動で実際に観測されているのは、軌道と軌道の差異。その差異を集めて、総体の運動を考える。

・ライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716 ドイツの哲学者）の予定調和：宇宙は互いに独立したモナド（monad、単子）から成り、神によって定められたモナド間の調和関係によって宇宙は統一的な秩序状態にある、とする。

・レヴィ・ストロース（Claude Lévi-Strauss, 1908-2009 構造主義の文化人類学者）の『親族の基本構造』（1949年）：オーストラリアのアボリジニの親族構造の体系解明を数学者のアンドレ・ヴェイユ（André Weil, 1906-1998）に依頼。ヴェイユはそこに群論（集合が群の定義を満たすとき、その集合の性質を研究する論理）に基づく結婚の関係図を見出した。

上記はいずれも構造主義がもたらした「関係性」を前面に打ち出した考え方である。

11）イヴ・タディエ，ジャン（Jean Yves Tadie）『20世紀の文学批評』西永良成、山本伸一、朝倉史博共訳，東京：大修館書店，1993年．pp. 55-57．参照

・ドイツ批評　フリードリヒ・グンドルフ（Friedrich Gundolf, 1881-1931）によると、創作行為における作家の「材料加工」には3つの方法がある。

1．抒情 ― 作家の存在と経験　材料は「春」ではなく、「春の経験」

2．象徴化―外部の材料を獲得して、それを組み立て（表現し）たり、変形（再現）したりすること
3．アレゴリー化―アレゴリー（allegory, 寓意）的作品は「文化的経験が優位に立つ」ので、詩人そのひと（作者）の経験や感動は押さえつけられ、思想や定型としてしか現われてこない。

【参考文献】

1）イーグルトン，テリー（Terry Eagleton）『新版 文学とは何か―現代批評理論への招待』大橋洋一訳　東京：岩波書店，2009年.
2）大橋洋一編『現代批評理論のすべて』東京：新書館，2009年.
3）カラー，ジョナサン（Jonathan Culler）『文学理論』荒木映子、富山太佳夫訳　東京：岩波書店，2003年.
4）川口喬一、岡本靖正編『最新　文学批評用語辞典』東京：研究社，1998年.

※本論は、第78回アブダクション研究会（2011年5月28日）での発表内容に加筆修正したものである。貴重なご意見を頂いた代表者福永征夫氏及び参加者各位にこの場を借りて心から感謝申し上げる。

Essay on *One Hundred and Eight Shooting Stars*: A Critical Approach to Japanese Contemporary Literature

Shinko FUSHIMI

Abstract

The purpose of this article is to analyze *One Hundred and Eight Shooting Stars*, a work in Japanese contemporary literature by Kenji MARUYAMA, using modern Western critical theories.

First, from the perspective of écriture, the formation of this work is a collection of 108 short stories plus a poetic preface. 108 refers to a human being's 108 desires in Buddhism and infinity. Although the preface points to the central theme of all the stories, each story stands alone. Inversely, each one of the stories alludes to the theme, so that we can grasp it by reading between the lines. There exists a latent relationship and cognition between the stories and the theme.

Second, Maruyama tries to define the relationship between himself and the readers through strict usage of nouns and adjectival expressions, in order to avoid broad interpretations by the readers. In this way, his intention is more certain to be conveyed without misunderstanding.

Third, concerning the background of this book, the author's pantheistic Buddhist leanings are evident as can be seen in the title. The omnipresence of *Dainichi* is suggested throughout the stories. *Dainichi* radiates the light of mercy to all beings on earth and is the core of a *mandala*, a matrix representing the universe. *Dainichi's* mercy causes varied experiences of relief according to the characters. Relief is thus relative.

As the preface tells us, each one of the stories suggests to us 'a moment shining like a shooting star' in the 'boring, nonsensical and miserable life' of modern Japan. Examined through Western critical theories, Maruyama seems to depict a modern *mandala* in this work.